
モノガタライズ

オカザキレオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノガタライズ

【Nコード】

N6523W

【作者名】

オカザキレオ

【あらすじ】

短編から中編の色々な形のオカザキワールドを集めていきます。気に入ったらものがあつたら続編あるかも。とりあえずは旧作も混ぜて気長に適当に。

夏休み

夏休み

夏休みが始まって、僕は睡眠をむさぼっていた。普段、バイトと学校、部活との忙しさからゆっくり眠ることがないので、ここぞとばかりに微睡む。外では子供の声とラジオ体操が流れている。夏はバイトも倍になるし、部活も忙しくなる。写真部に所属してる僕は、秋のコンテストに向けて作品を撮っていかないといけない。

「陽一朗アニ、起きろよ」

一番下の弟の晃が声をかける。

「飯なら昨日、用意してたろ。みんなで食っとけ」

「でもね陽アニ」

と長女的美樹が声をかけた。

「ラジオ体操に行けよ」

と邪険に扱う。

「兄さん、いい加減にしてくれよ」

次男の陽太がため息をつく。

「そうだよ、待たせちゃ可哀想だよ」

と次女の亜香里が僕をゆする。

「寝かせろ．．．．．また昼からバイトなんだよ．．．．．」

「」

「起きないと後悔するぞ」

と晃が耳元に囁く。

「起こすとお前ら後悔するぞ」

すでに脅しに近い台詞を僕は呟く。

「いいの」

聞き覚えのある声がした。「ゆっくり寝かせてあげて。私、待ってるから」

「え？」

僕は間抜けな顔で、起き上がった。

「志乃？」

「おはよう、陽ちゃん」

彼女はにっこりと笑った。

志乃と僕は幼なじみだ。幼稚園の頃からずっと一緒に遊んできた。どちらかと言うと僕が志乃を連れ回していたというパターンが多かったけど。高校から別になって会う機会はそんなに多くはなかったから、突然懐かしい顔が目の前にあって、驚きを通り越して、僕は間抜けな顔で啞然とするしかない。

学校が違うだけが会わなくなった理由じゃない。

一つは志乃に彼氏ができたこと。

志乃のことが好きだった僕は、あえて志乃から遠ざかっていた。一度志乃に紹介された事があるが、北村という気さくで咲くような笑顔を見せるいい男だった。二人で笑っている姿は眩しくて、ずっと大切にしていた仄かな気持ちを殺すことはそんなに難しくなかった。

もう一つは両親が交通事故でなくなったからだ。あっさりと、あつけなく。

長男僕17歳、次男陽大15歳、長女美樹14歳、三男晃12歳、次女亜香里10歳を抱えて、親の保険金だけでは生活できるわけもなく、親戚同士の関係も希薄で連絡はとれず、僕が働くしかないというわけだ。最初の一ヶ月は放心状態で、それを振り切るためにバ

イトに励んでいた。が、次第に家族の顔を見てみると、コイツラのために仕事をできるように頑張って来た。

悲しくないわけじゃない。ただ、前を向こう。と陽大に背中を叩かれたのが一度や二度じゃない。陽大は新聞配達もしているが、そろそろ辞めさせようと思っている。高校受験を控えているのだから、そろそろ勉強に集中させなくてはいけない。陽大は嫌がることは目に見えているが。

それでも長兄として、こいつらを守りたいと本気で思っていた。

僕と志乃は強い日差しの中を黙々と歩いた。

彼女の手にある向日葵が全てを物語っていた。少し早いが、二人で父さんと母さんの墓へと向かう。向日葵は父さんと母さんが一番好きな花。僕の名前の陽一郎は、そんな向日葵を咲かせるような太陽のような子であるように、と名付けたらしい。名前の意味付けですでに負けている。

「陽ちゃん」

「ん？」

「ごめんね。陽ちゃんが大変な時に、何もできなくて」

僕は志乃を見た。通夜でも葬式でも一言も話せなかったが、それは僕の追いつめられた精神状態が原因だった気もする。今なら、自然に笑える。現実として理解できるほどに冷静になれたのは兄弟達のおかげだ。

「志乃が気にする事じゃないよ」

僕は日差しの強さに目をつぶった。

「陽ちゃん」

「え？」

僕は志乃を見た。志乃が泣きそうな目で、僕を見ていた。その目

に吸い込まれそうになる。

「志乃？」

「ごめん、私、卑怯だね」

と向日葵の花がぼろりと落ちる。志乃の目から涙がこぼれ落ちた。止めどなく、止まらない。僕は呆然と志乃を見つめて、動けなくなつた。

「私、卑怯だ。ごめん、ごめんね」

と泣いてばかりいる志乃に、僕はどうしていいのか分からない。ただ

「どうしたんだ？」

と声をかけた。志乃の体が震えている。

「陽ちゃんね、会う機会が少なくなつてから、ずっと陽ちゃんの事考えてたの。陽ちゃんが意識して私を避けていたのも分かったの。陽ちゃん優しいから、すぐそういう事に気を回すから」

そういうこと・・・。。僕は黙つて志乃の声を聞いた。

「でもそうなつてから、初めて気付いたの。陽ちゃんと一緒にじゃない時間がどれだけ苦しいかって」

志乃の声は嗚咽になった。「陽ちゃん大変なのに。北村君も傷つけたし・・・。」

あとは言葉にならず、涙に変わった。

「卑怯、私、卑怯だよ、ごめんね、陽ちゃん、ごめんね、ごめんね、ごめん・・・。」

僕は志乃を抱きしめて、その言葉を塞いだ。

・・・陽一郎。

父さんが昔言つた言葉を思いだした。

下の兄弟を守ってあげるんだぞ。そして志乃ちゃんもな。男ならそれぐらいできるな。

幼い僕はコクンと頷いた。手には志乃の小さい温もりが伝わっている。

――陽一郎。

母さんが言った。花はね、大切にしないと枯れちゃうの。でも大切にすぎても枯れちゃうの。

陽一郎のお花は志乃ちゃんかしら？

僕はコクリとうなずいた。志乃が嬉しそうに笑った。

「志乃？」

僕は向日葵を拾い上げて言った。「行こう？」

「うん」

と言いつつ、志乃は僕から離れようとしなかった。

時間が止まったように。

熱くて仕方ないほどの日差しなのに、伝わる温もりはイヤじゃなかった。

「志乃」

「なに、陽ちゃん？」

「今度、写真とっていい？」

「写真？」

「そう、写真」

僕はもう一度、笑った。大切な人の表情を大切にしたいから。

花はね、大切にしないと枯れちゃうの。

でも大切にしすぎても枯れちゃうの。

陽一郎のお花は志乃ちゃんかしら？

僕は無造作にカメラのシャッターを切り志乃の表情を撮る。
照れたような笑顔。
懐かしい空気を僕は感じていた。

墓前の向日葵が優しく、僕らに微笑んでくれているような気がした。

夏休み（後書き）

過去作品（ewbページ）からの掲載なのでちと恥ずかしいですが、
名刺替わりとして。

ホットミルク

くしゅん。くしゃみが出る。

熱で意識が朦朧としている感じた。朝から何も食べていないのだから当然だが食欲も湧かない。ただ、ぼーっとベットに横になり天井を睨んでは、ため息をつく。

「寝ている場合じゃなんだけどなあ」

と呟く。その声が枯れていた。

今朝、悪友からバイト禁止令が出た。昨日も40度の熱があつても、平気でバイトをしていたツケが、今まわってきた感じた。ふらふらで立っている事もままならない。

悪友は呆れ半分怒り半分の表情で、学校とバイトは休むように――――命令し、学校へ登校していった。

悪友が朝食にお粥を用意してくれたが、それに手つをけず、無駄に時間だけを食い潰していた。

「しかし働かないと、金が無いしなあ」

ジレンマ。ため息である。

と玄関をノックする音がする。立ち上がる気力が無い。と、鍵がカチャリと音をたてて、玄関のドアが開いた。悪友が帰ってきたのかと思つたが、その予想は見事に裏切られた。

「愛？」

とその子の名前を呼んだ。小柄な愛が心配そうに玄の傍に真つ先に駆け寄ってきた。

「玄君、大丈夫？」

「お前、学校は・・・？」

「今日は半日で休みだよ、こういう日に限って休むんだから」

「・・・・・・休みたくて休んだわけじゃ・・・」

と立ち上がろうとして、視界がぐるぐると回った。慌てて、愛が

玄の体を支えた。

「無理しちゃ駄目だよ。あ、朝ご飯も食べてないし！」

「食いたくないんだよ」

「でも食べないとよくならないよ」

と愛はじつと玄の目の奥底まで見つめる。玄は照れたように視線を外した。

「それより、銀は？」

「楓ちゃんと瞳とお昼食べてから帰るって」

「アイツは俺を病人として扱っているのか、本当に？」

友情を疑いたくなる瞬間である。

「だから私が来たんだよ？」

につこりと愛は笑う。

「別に銀達と一緒にいてもよかったんだぞ？」

愛は首を振った。

「そんなことしたら、玄君、ご飯も何も食べないでバイトに行こうとするでしょ？ だから銀君にお願いされたの」

さすが悪友。体力が回復したらまさに、その行動を移す予定だっただけに反論の余地は無い。

「凶星でしょ？」

愛がからかうように笑った。玄にできるせめてもの抵抗は「うるせえ」

と悪態をつくのみだが、それすら愛には予想の反応、微笑んで聞き流す。

「何か食べたいのある？」

「無い」

即答。じつと愛は玄を睨んだ。その顔が少し怒っている。

「玄君、食べないとよくならないよ」

「……………いらない」

「玄君」

今度は本気で怒っている。玄は息を吐きだし、手を上げて降参を

示した。

「分かったよ」

と渋々と言うと、愛の表情が笑顔になる。

「よしと。それじゃ、私が腕によりをかけるからね」

と早くも腕まくりをする。「その前に何か暖かい飲み物、作ろうか？」

「ん・・・じゃ、コーヒーをブラックで」

じとり、ともはや愛は言葉もなく睨んでいる。

「何だよ、何ならいいんだよ」

と玄は膨れる。愛はじつと玄を見つめる。玄は目をそらす。しかし愛は厳しい目で玄を見据えた。

「玄君は、もつと体を大切にしなきゃ駄目だよ」

「・・・・・・・・・・」

「無理ばかりしてる」

「でもな！」

「玄君」

愛の言葉は玄を諭すように重く、のしかかった。苦笑する。どうも、愛には勝てない。悪友もそれを見越して、愛に頼んだと思われる。姑息な手段を使いやがってと、心の中で悪態をつきつつ、諦めの境地である。もつとも、自分が動ける状態でないのも、自覚している。

「分かったよ」

と半ばヤケクソ気味に、ベットに横になった。愛がクスリと笑みをこぼすのが見えた。が、愛は玄に言葉をかけず、そのままキッチンへ行ってしまふ。

コトコトと鍋で何かを煮ている音がした。

と、愛がマグカップを手に戻ってくる。

「ん？」

「ホットミルク。体、暖まるよ」

「俺はコーヒーの方がいいんだけどなあ」

とその口調には情けなさすら滲むが、受け取って口をつける。じわり、と体に熱が伝わっていくのを感じる。ほっと一息つく。

「たまにはいいでしょ？」

と愛もホットミルクを口にした。愛はコーヒーが飲めないの、いつもホットミルクを飲む。玄はそんな愛を見て「お子様」とからかう。そして、ぷーっと風船のように頬を膨らませて愛はいつも抗議する。それがたまらず、可笑しかった。

「たまに休まないと、体が可哀想だよ？」

じつと愛は玄を見つめる。

「分かつてる」

と仕方なさげに言う。愛はにつこりと満面の笑みを浮かべた。

「今、栄養のあるモノ作るからね」

と言って、立ちかけた瞬間だった。玄が、瞼を閉じて愛の肩にもたれかかった。

「げ、玄君？」

と慌てるが、その後に聞こえてくる静かな寝息に、愛は優しく微笑んだ。玄のその手に持っているマグカップをそっと取り、ゆっくりとベットに寝かせてあげる。

愛はそつと玄の首筋に手を触れた。普段の玄なら、意地になって、その行為すら許さない。想像以上に熱があるのに愛は驚いた。

「まったく無理ばかりするんだから」

と玄を見つめて、そう言う。「心配するのは誰だと思っているの、まったく」

ちよん、と指で鼻を弾く。玄は身動き一つせず、眠りの底へと落ちていた。何だかんだいって、安心したのかもしれない。そんな玄を見て、愛も少し安心した気がした。

「今、美味しいモノを作るからね。風邪ひいている暇なんか無いくらい！」

とぱたぱたと足音をたてて、キッチンへと走っていった。

ホットミルク（後書き）

これも別の連載の中の人たちの短編。この子達は好きなのでまた書きたい。とりあえずは2作、新作をじゅんびしてますが過去作で箸休め（表現が違う？） あ、なんか可愛い恋愛小説ネットであつたら教えて下さい。ここで言うのも何か違うが（笑）

ふわふわ浮かせて

ふわふわ浮かせて

*

僕はきょとんとして、彼女の言葉を聞く。思わず、淹れた紅茶をこぼしそうになった。

「私は君がいてくれるから、浮けるんだよ」

にこにこと笑う。僕はやっぱり紅茶をこぼして、慌てて拭く。もつたいないもつたいない。

「浮くってどこに？」

新しい研究なのかと思った。彼女はいつも難しい数式と取り組んでは、一部分だけ重力を軽くする方法について研究してるらしい。今は小さな小屋程度の場所で、月の重力への出力に挑戦していると言っていたのを思い出す。

すごい、と思う。僕はお菓子しか作れない。

「君の場所に」

「君のところに」

「君が感じられる場所に」

まくしたてて、僕へダイヴする。今度はすかさず、紅茶をテーブルの上に置く。そして受け止める。まるで小犬のように僕にすりよる君を見ながら、いつも感じるのは天才科学者も人間なんだ、という事。

そして僕は天才科学者じゃなくて、僕の紅茶とお菓子を食べてくれる女の子……マキセ・ハルナという子が好きなんだ、という事を自覚している。

「でもね」

君は真剣な顔で僕を見る。数式を睨んでいる時よりも真剣。本当に切りつけられたような視線で僕を射る。

「君がいなくなったら、私は沈んでしまうから」

「うん」

「本当に沈んでしまうから」

「うん」

沈む、という意味がまだよく分からなかった。彼女は自分で命を潰すような人じゃない。ハルナは自分の存在の重さと研究をもしかしたら、世界で唯一導き出せる人間だということを自覚している。

僕とは違う。

僕は数あるお菓子の一つだ。ハルナが好きだと言ってくれたお菓子の一つ。いつか在庫に埋もれて、新しいお菓子に目がいつて、僕の方が沈むだろう。でも、ハルナの沈むという意味はそういう意味じゃない。僕は自覚が足り無すぎた。

*

ふわふわ浮かせて - - - - -

*

ハルナは沈んだ。

スイッチが切れた感じた。何をしても受け付けない。理由は僕がお店で、お客さんの女子高生に「好きです」と言われている場面を目撃されたから。まんざらでもない僕の顔を見て、彼女は何を言うでもなく店を後にした。怒ってるふうでもなく、悲しんでるふうでもなく。

そう思っていた僕は馬鹿だった。

帰ると、ハルナは沈んでいた。虚ろな目で、ずっと一点を見ている。腫れた目で、僕を見る。でも、僕の事はまるで視界にはいらない。

いように、別のものを見ている。

沈んでいく。それが分かった。科学者のハルナにあるはずの強さがなかった。

僕は言葉をかけた。

彼女はそれを返さない。

そんなの初めてで、僕は困惑した。

科学者マキノ・ハルナは強い人だ。天才で、世界の財産で、きっと宇宙に飛び出す人類に貢献する偉大な人物として歴史に記される。一方の僕は単なるお菓子職人。本来なら釣り合いなんかとれるはずもない。僕はいつもそれを負い目に感じていた。

だから、僕はお菓子の一つでいつか飽きたら、在庫の中に埋もれてしまう。

沈んで沈んで、もうハルナは見つけてくれない。そう思っていた。

「……………」

なにかハルナが喋った。僕は聞き取れなくて、もう一回聞く。

「なに？」

「ゆ」

「え？」

「ゆるさない」

「は？」

「ゆるさない！ 違う子にへらへらした顔が許せない」

「あの、ハルナさん……？」

「私……コウタ君に言っただよ。貴方がいないと沈むって。貴方がいてくれたら浮くって」

「うん、でもさ、あの子、高校生だよ？ そんな本気で言ってるわけないし」

「私の言葉も本気じゃないと思ってたの？」

「え？」

「女の子が心の中も知らない人に好意を伝える事が、何でもない事だと思ってるの？」

「・・・・・・」

「コウタ君」

「はい」

「私を浮かせて」

「はい？」

「抱っこして、空へ浮かせて」

「あの・・・ハルナさん」

「何？」

「僕の非力さを覚えていると思いますが」

「私を月に連れて行って」

「あの・・・無理でしょ、それは」

「無理じゃないよ。コウタ君が抱っこして、お外まで連れて行ってくれたら、今度は私が絶対、コウタ君を宇宙へ連れ出すもの」

真顔でそう言う。科学者はそんな事言わない。甘い事は言わない。希望的観測は言わない。初めてお店で会ったとき、ハルナさんはそう言いましたよ？

「私は事実を事実として言ってます」

「事実って？」

「コウタ君が私を浮かせてくれるから」

僕はため息をついて、ハルナさんを抱きしめる。彼女の体は標準的に見て軽いが、僕の体重は標準的に見て圧倒的に軽いので、彼女をお姫様抱っこした時、僕はついふらついてしまう。でも、彼女は落ちまいと僕にぎゅっと、掴まって、多分、僕が転んでもその手は離さないんだろう。

笑顔が戻った。彼女は浮いた。僕は玄関を開けて、靴をはいて、外に出る。階段を降りる。ここで転んだら、二人で入院生活もある。僕なんか見た目からして、骨が脆そうだし。我思う。お菓子の砂糖は骨を溶かす。しかしその前に目の前の女の子が僕を溶かす。月、でてるね」

ふらふらしながら、僕はなんとか彼女に言う。彼女は満面の笑顔

で僕に頷き返す。

「宇宙船ってこんな感じかな」

「え？」

「ふわふわしてて。無重力になったら、こんな感じなのかなって」

「それはハルナさんの領分です。僕はお菓子しか作れないからね」

「じゃあ、宇宙でお菓子を作って」

「無茶言わないでください」

「私、最近思った」

「はい？」

そろそろ手が痺れてきた。

「コウタ君のお菓子食べられない場所には行きたくない」

「また無茶を言って」

「だから旅行に行くのも、コウタ君と一緒にじゃないのなら行かない」

「はいはい」

僕は苦笑い。でも、彼女の目は笑ってない。

「君は私がいなくても平気？」

「……平気じゃないです」

声を絞り出す。それは本心。でも、足もよろけてきた。

「倒れてもいいよ」

「はい？」

「倒れても、私は離さない」

「あの、ハルナさん？」

「それくらいそれくらい、私が君の事を考えているって自覚しても
らわないと」

「あの……？」

「貴方の作るお菓子が好きじゃなくて、作ってくれている貴方が好
きななのよ？」

「う……ん」

「だから、君はお菓子の在庫なんかじゃないの」

お見通し……ですか。

「私がね、一生かけて大切に食べる、私だけのお菓子なんだから」
僕は顔を真つ赤にしながら後ろに倒れた。思わず、彼女を強く抱きしめた。そのせいで、アスファルトにしたたかに、頭を打つ。一瞬、夜空が白く輝いた。

「大丈夫？」

君がそういう事を言いますか？

「痛いのか？」

僕は素直に頷いた。彼女の手が僕の頭をそつと撫でる。

「痛い？」

もう一度、聞く。今度は僕も声を出して「うん」と言った。彼女は嬉しそくに、もう一度、僕の頭を撫でる。

「私はもつと痛かった」

「え？」

「私を浮かせて」

そう僕にまたがって言う彼女は本当に空へ浮いていくように見えた。

空へ浮かんで、宇宙へ浮かんでいくように見えた。

*

ふわふわ浮かせて - - - - -

*

ハルナの研究は現実段階になったらしい。彼女は満面の笑顔で僕にプロジェクトの説明をしてくれるが、概要だけでちんぷんかんぷんだ。要は国家規模宇宙ステーションの要となる重力機構の開発を担当する事になるらしい。確かに重力が無いのは不便だ。僕はしみじみとそう言うと、彼女は苦笑した。

「一番はエネルギー炉の安全の為なのよ」

高出力のエネルギーを凝縮している訳だからその扱いは慎重になる。まして実験段階ではない、人の生活する場所として長期的視野で見たら、重力システムは必然だ。人間の体に作用する重力がもたらす精神安定に関する論文もハルナは書いている。機械だけじゃなく、人にも重力は影響する。そして磁場をコントロールする事で、小彗星からの衝突を防衛する防御壁ともなる。まさに命のパイプなのかもしれない。

「ふーん」

と僕は紅茶をすすりながら、聞いている。

彼女は浮こうとしている。青空をぬけて。でも、そこには僕はいない。今、ハルナに僕は必要無い。お菓子を食べる時間も忘れて、数字とにらめっこ。技術者とメールのやりとり。電話の鳴らない日は無い。僕はそんなハルナをただ見つめている。彼女がいつか、お菓子を「いらない」と言う日を。

その声が届く日に怯えていて。でも覚悟していて。

「チームはアメリカで結成するらしいんだ」

にこにこ笑顔の彼女を見て、僕は悟った。ああ、そうか今日がその日なんだ。

彼女が一人で浮く日。

僕は在庫の一つになってしまう日。

「そこで」

「はい？」

「アメリカ国家予算をつぎ込んで、君を私の専属のパティシエにしました」

「あの・・・ハルナさん？」

国家予算の使い方、間違ってますか？ しかもアメリカの予算じゃないですか。僕は日本人だし。

「研究費の一環よ」

「いや、一環とかじゃなくて、使い方を間違ってます」

「私は君のお菓子を食べたい」

「食べられますよ、いつだって」

「食べられない。君は私を遠ざけようとしている」
それもお見通しですか。

「私は君がいないと浮けない」

「いや、それとこれは別問題で――――」

しかし彼女はじっと僕を見つめるのみ。そしておもむろに電話へと向かって歩く。

受話器を取り、プッシュを押す。

彼女はもう一度、僕の顔を見る。コールがきつと彼女の耳で鳴り響いている。

相手が出たらしい。

「教授」

と彼女は英語で言った。彼女はわざと僕に聞こえるように、スピーカーを電話に接続していた。

「ハルナ、どうした？」

気むずかしい声。厳しく、威厳のある声。僕にも和訳するぐらいのヒアリング能力はある。とはいえ、これも彼女との生活で培われた能力だ。僕の知らない男と何を話していたのか――――英語を必死に勉強した結果の答えは、意味も分からない数式のみ。心配するだけ損というヤツだった。

「今回のプロジェクト、私、降ります」

「は？」

相手も彼女の言っていた意味が分からない様子。クエスチョンマークをスピーカーから僕に飛ばしてくる。僕はなおさら、啞然として彼女を見つめている。その彼女の目が揺れていた。

彼女は沈んでいる。

「ハルナ、君の力なくして宇宙ステーションの開発はありえない。戯れ言はよせ」

もったもです。それがもったもな助言です。なんとか説得してやってください。

ハルナは僕を見てる。

浮かせて――――

そんなに弱い女の子だったんだろうか？ 天才と学界では騒がれ、25歳で今の地位にある。学識の華とすら言われて、去年はノーベル賞も貰った人だ。この年齢での獲得は前代未聞だと言っ。それだけハルナの導き出した答えは、人類を宇宙へ出向かせる確実な一歩になっている。

僕は彼女を強い人だと思っていた。

浮かせて――――

もう浮いているのに？ 君は君の力で、その足で。

私は君がいないと沈んでしまうから――――。

本気でそう言ってたんですか？

「パティシエ！」

「は？」

いきなり声は僕に向けられる。怒気をさらにはらんで。

「説得しろ、これは人類の損失だ！」

「あの・・・？」

ハルナさん？ 君って人はもしかして、全部、裏工作していたんですか？

「教授、コウタ君のいない場所なら、どんな栄光も名誉も私は欲しいとは思いません」

「ミスター・コウタっ！ 貴様、アメリカの国家総予算一年分組んでも、条件は飲めないというのか！」

「はい？」

あのハルナさん、一年分って・・・滅茶苦茶、横暴じゃないですか！

「私は」

彼女は受話器を持つ手をぶらりと下げて、絞り出すように言っ。

「君が浮かせてくれる。気持ちも未来も、私自身も。君がいらないのなら、未来なんかいらない」

「でもね、ハルナさん！」

「全部、沈んでしまえばいい。君のいない世界なんて」

「……僕はお店で働いているんですよ？ クビになるじゃないですか」

なんて陳腐な反論だ。店と彼女、どちらが大切なんだと罵倒されそうだが、でも、彼女は小さく笑った。微笑んで、僕を溶かすようなそんな感触。彼女は笑みで、僕の言い訳を全て叩き壊してしまう。

「沈んじゃえ。コウタ君のいない世界なんか」

僕は頭を掻く。本心でそう思っているのが分かるから。多分、不器用なんだ。そんな事は分かっている。で、僕は多分、器用すぎる。彼女の気持ちを分かっている、どうしたら彼女を前に前に押してあげられるかを考える。それを彼女は望んでいないのに。

住む世界が違うのは悲しい。君がとても大きくて僕はとても小さいものに思えてしまうから。

できるなら普通に恋をして、普通にお菓子を好きな普通の人を好きになりたかった。

どうして天才科学者なのか、と思う。

どうして君なんだろう、と思う。

「国家予算なんかありません」

僕の結論。彼女の表情が翳る。沈んで沈んで沈んでいくのが分かる。

でも次の言葉で、僕はきっと彼女を浮かせる事ができる。確信がある。

「欲しいのは、ハルナさんです」

もう後戻りできない。彼女の笑顔が――――表情に色が灯るのが分かる。

お菓子作りは面倒だ。それより面倒な世界で一番厄介な恋に翻弄されている。初対面から何気ないふりをしてきたけど、直感が一番正直だった。一緒に生活して、肌でひりひりと感じてきた。

僕は彼女を浮かせるより先に彼女に浮かされている。

彼女は言葉にするより早く、僕に抱きついてきた。

僕はハルナさんを抱き返す。

電話のむこうで、教授がハッピーウェディングを口ずさむ。糞食らえ。でも、と僕は多分、君を偽れない。君が僕を必要ならその選択を受け入れるだろうけど、僕が彼女を放り出すなんて事は有り得ない。ある意味では、天才と言われた彼女を生かすための悪あがき。難しい単語ばかり並べている彼女を見るのは嫌いじゃない。その為ならブラウン管から眺めるだけでもいいと思ってた。

あの人が世界を変える瞬間を見たい。

邪魔なら僕はいつでも消えよう。常にそう考えていたから――

――

「許さない」

「え？」

「私の目の前から勝手に消えたら許さない」

「誰もそんなこと」

「コウタ君はいつも、そう考えていた」

それも、お見通しですか。

「私はそんな事許さない。でもコウタ君が傍に居てくれたら、世界なんかいくらでも変えてあげる」

「いなかったら？」

「世界を叩き壊す」

魔王か、君は？

「魔王でも悪魔でもなれる。コウタ君が私の傍で笑ってくれるならどんな事でもする。この地球を一瞬で木っ端微塵にする爆弾だって作ってやる」

真剣に真面目に彼女はそう一気に言葉を吐き出す。彼女なら不可能じゃないと思うから、自分の頬に冷や汗が流れるのを感じる。彼女は本気だから、本気でそう言っているから。

僕は答えるかわりに力強く抱きしめた。それを彼女が望んでいることを知っているから。

「私を浮かせて」

*

ふわふわ浮かせて - - - - -

*

「目を開けちゃダメなんですか？」
「ダメ」

彼女は強く言う。冷凍睡眠カプセルに強引に押し込められ、世界で初めて冷凍睡眠を体験し時間を停止させられて、今度は目を閉じることを強要されている。でも、僕は彼女の言うことを忠実に従っている。彼女は何をしようとしているんだろうか？ 分からない。ただ、妙に子どものようにドキドキと期待が入り交じっている。

「コウタ君は」

僕の手を引きながら、言う。

「はい？」

「今、どこにいるか分かる？」

「研究所じゃないんですか？」

「違います」

「じゃ、どこ？」

「当てて」

目隠しされて分かるか！ と反論したいのをこらえて僕は冷静に考える。

「ホワイトハウス」

各国の要人が秘密裏に会合をしているのかもしれない。今回のプロジェクトの事で。だから冷凍保存までして、こうやって僕に時間と位置の感覚を失わせたのかもしれない。僕は知っている。彼女の住む世界と僕の住んでいる世界は違う。彼女の一言で、科学は革

新し、政治はそれに食いつき、何千億ドルもの金がいとも簡単に動いている。

「違います」

と彼女は微苦笑する。「あんなつまらない人とコウタ君を会わせるのは時間の無駄」

あつさりと言い捨てる。

「じゃあ？」

「それを教えたらクイズにならない」

「ヒントをください」

「コウタ君に私が見せたかったモノです」

思考を巡らせる。彼女が僕に見せたかったものは一つしかない。それは宇宙だ。でも、それはとくの昔に見せてもらっている。宇宙にちりばめられた宝石達、それは遙か何億年も前の星のシグナル。生きた証拠。今でこそ宇宙ステーションは各国の研究観察施設ではないが、そこへの移民計画も動き出してる。

「また宇宙？ それとも月？」

「違う」

「じゃあ？」

「教えて欲しい？」

「うん」

「じゃあ、約束できる？」

「なにを、ですか？」

「私たちを一生、幸せにして」

「え？」

「約束して」

ぎゅっと、僕を握る手に力がこもる。僕は戸惑う。私たち・・・？ だけど僕が思うより早く、彼女は僕の目隠しを外していた。そこにあっただのは、光り輝く星でも、水の無い月でも、機械で組み込まれた宇宙ステーションでも無かった。

ベットの上ですやすや寝ている乳児が、そこにいた。髪の毛が産

毛程度で、お猿さんみたいな赤ちゃんがそこに。彼女は僕を見てにこにこ笑う。僕は吞まれてしまったように、次の言葉が出ない。

「どうして？」

「コウタ君と私の子どもです」

「いや・・・え・・・でも？」

「コウタ君がいなくなりそうな気がしたから、いなくならないようにしたの」

反論できない。確かに僕は彼女の邪魔にならないように、色々と思いを巡らせていた。一部の科学者達は、学識の華が、ただ一人の男にうつつを抜かして、研究に集中してないという陰口をしている事を耳に挟んでいる。わざと僕に聞こえるように言ってるのは間違いない。だから・・・秘密裏に懇意の科学者や政治家に話しを通して、僕の特権を剥奪してくれるように頼んだ。

僕にはあまりにも大きすぎる特権だ。ただのお菓子職人が。抱きしめている彼女の存在はそれよりなお大きい。時々、僕は潰されてしまいそうになるから、なおさらこんな決断を下した。僕はただのお菓子職人で、彼女は偉大な科学者で、歴史に名を残す。僕はその邪魔をしている。それを感じるから、科学者達が言うまでもなく身を引こうと思う。

でも彼女はそれを許さない、と言う。

「何回も言う。コウタ君は私を浮かせてくれるの」

「うん」

「科学者の私を好きになつてくれたの？ それとも私を好きになつてくれたの？」

「マキノ・ハルナさんを好きになりました」

「それなら、どうして私から離れようとするの？」

今にも泣きそうな目で僕を見る。冷凍保存なんて言うトップシークレットの技術まで使って言いたかった事はつまり、これなのだ。純粹に素直にまっすぐに彼女は僕に気持ちをつづけてくる。躊躇無く、臆さず。もう何度も感じていることだ。この小さな科学者は名

誉よりも栄光よりも、僕なんかを選んでしまう。それは何よりも犯してはいけないミスなのに。

「じゃあ、逆の事を聞くけどいい？」

「え？」

「私の幸せは何だと思うの？」

言葉に詰まる。彼女が幸せに思う事――――僕は、彼女が科学に革新をもたらして、歴史に名前を残すことが彼女にとっての幸せになると信じていた。でも、彼女は小さく笑んで首を横に振る。

「コウタ君がいなくなったら」

冷えた声で、でも僕から目を反らさずに呟くように言う。まるでナイフのように研ぎ澄まされた痛みがヒリヒリと感じる声音で、僕の心を突き刺してくれる。

「私、もう多分、ダメ」

小さく笑う。

「浮けない、浮けないよ。コウタ君という重力に縛られてるの。寝ても覚めてもコウタ君なの。コウタ君がいないと重力に縛られて、押し潰されそうなの。でもコウタ君が居てくれると心配は無くなるから、頭に数字がどんどん浮かんでくるの」

僕はじつと彼女の言葉を聞いている。

「もしもね」

彼女は穏やかな笑みを僕に向ける。痛みじゃない。まるで花束を放り投げたような、そんな綺麗な微笑を彼女は浮かべて。何より誰より綺麗だと不覚にも思う。

「私が本当に人類の財産だと言い切ってくれるなら、一人では浮けない私を浮かしてくれるコウタ君も人類の財産なんだよ。だって――――」

一滴、頬を伝わり流れた水滴が床に落ちる。それでも彼女は精一杯の笑顔を咲かせて、僕を見つめ続けている。

「君がいなくなる事を考えると苦しいの。何もできないの。そんな

事は考えられないの。君はね、決して在庫なんかじゃないし、私を浮かせてくれるのは君だけなの。君しか私を浮かせられないの。もしも君がここでいなくなったら、私は永遠にサトウ・コウタっていう重力に縛られて、押し潰されて死んじゃう」

ベットで赤ちゃんがいきなり大声をあげて、泣き出す。

「いなくならないで」

彼女はまるで子どものように言う。

「私たちをふわふわ浮かせて」

僕は彼女を力一杯抱きしめた。その頬に手を触れる。とめどなく流れる雫を拭い、そつと唇を重ねて、僕は考える。僕がもしも彼女をふわふわ浮かせているなら、彼女も僕をふわふわ浮かせてくれている。そんな当たり前の事に気付かなかった。自己犠牲はある意味では英雄のようだ。でも、そんな意味無い。

彼女から離れて、僕達の子どもを抱きしめた。

僕達の子どもは、今にも壊れてしまいそうなくらい柔らかい。潰さないように、壊さないように。僕は優しく優しく抱きしめる。何もこんな回りくどい手を使わなくても、と思う。でも、彼女なりに考えて考えた末だったと思う。僕が眠らされてから産むまで彼女は一人で戦った。多分、学者達からの不平不満があつたに違いない。それでも、彼女は迷わず産んだ。僕はなんて弱い父親なんだ、と思うってしまう。

「一人じゃない」

「え？」

「君が傍にいてくれる、って思ったから。この子が生まれたら、きっと君はどこにも行かなくなると信じてたから。君は優しいから」
確信犯。彼女はにつこりと笑んだ。その目にこめられた感情は決して押しつけじゃない。でも、揺らがぬ物を信じている。どうでもいいか、と僕は思った。天才科学者とかお菓子職人だとか、そんなのどうでもいいじゃないかと思う。

僕達の子どもが、小さく、ほんの微かに微笑みを浮かべたように

見えた。どうでもいいよパパ、と僕にそう呟いてくれたような気がした。

そう、どうでもいいんだ。

浮くんだ、僕達はふわふわ。ふわふわと。

僕はその小さな体をベットへ戻して、躊躇無く彼女を抱きしめた。彼女は目を点にして――――そして、抱きしめ返してくれた。

この瞬間、僕らは確かに空へふわふわ浮いているように、そんな錯覚に陥ったんだ。

*

浮くんだ僕達はふわふわと、あの月の向こう側よりも高く高く
ふわふわと――――

ふわふわ浮かせて（後書き）

過去作でお茶濁し第三弾（笑）

まあ、甘いお話は好きです。甘いお菓子はもっと好きです。そんな感じで、この前食べたショートケーキと、チーズケーキは至福でした。

いや、それはどうでもいい。

次の更新こそ新作をアップしたい。うん。がんばるぞー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6523w/>

モノガタライズ

2011年9月30日03時22分発行